

トビウオ通信 (H24 第 5 号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)
<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《マアジ新規加入量調査結果速報》

島根県水産技術センターでは、日本海区水産研究所、西海区水産研究所および鳥取県水産試験場と共同でマアジ幼魚の新規加入量調査を実施しましたので、今回はその結果をお知らせします。

結果の概要

- マアジ幼魚の多くは適水温帯(16～18℃)が広がる大陸棚上に分布していました。
- 調査結果を基に計算した今年のマアジ幼魚の加入量指数(来遊量の多さ)は、2003 年を 1 とすると 0.42 となり昨年(0.21)に比べると増加しましたが、来遊水準としてはそれほど高くないと判断されます。
- 今年のマアジ 0 歳魚の漁獲量は昨年より多いことが見込まれます。

マアジ幼魚の採集結果と分布状況

2012 年 5 月 14 日から 6 月 9 日にかけて図 1 に示す鳥取県西部から長崎県男女群島周辺の海域における合計 100 地点において、中層トロール網を用いてマアジ幼魚(2012 年生まれ)を対象とした漁獲調査を実施しました。その結果、尾叉長 2～5cm サイズを主体に合計で 10,137 尾(1 曳網当りの平均採集尾数は 43 尾)のマアジ幼魚が採集されました。

マアジ幼魚の分布状況(図 1)を見ると、今年マアジ幼魚の適水温と考えられる 16～18℃(水深 50m)の水温帯が鳥取県から対馬海峡までの大陸棚上に広がっており、

採集されたマアジ幼魚の多くはこの海域に分布していました。分布密度は島根半島以西の島根県沖合海域において高く、隠岐海峡から鳥取県沖では、適水温帯が広がっていたものの隠岐島東方から鳥取県沿岸域にかけて冷水の差し込みにより適水温帯が東西に分断される形となっており、周辺海域でのマアジ0歳魚の分布密度はやや低くなっていました。

マアジ幼魚の加入量と今後の漁況

マアジ幼魚の分布量に水深 50mの水温分布を勘案して求めたマアジの加入量指数(来遊量の多さを表します)は、2003 年を 1 とすると、今年は 0.42 となり、昨年(0.21)に比べやや増加しました(図 2)。ただし、来遊資源量の水準は決して高いとは言えず、調査を開始した 2003 年以降で見れば、平均的なレベルにあるのではないかと考えられます。この加入量指数は、その年の6月から12月の間に境港にまき網によって水揚げされるマアジ 0 歳魚の漁獲尾数とある程度対応がみられることから、今後の山陰沖におけるマアジ 0 歳魚の漁獲量は昨年を上回ると見込まれます。

また、夏季には他の浮魚類の漁獲が減少するため、マアジ 0 歳魚が集中的に漁獲されることが多いのですが、マアジは小型魚のうちに獲るより、一年後に成長したものを獲るほうが利用価値は高まります。また、小型魚を取りすぎてしまうと来年以降の産卵親魚の減少につながる恐れがあるため、過度な漁獲圧力がかからないよう適切な管理を行っていくことが大切です。現在、日本海西部・九州西海域ではマアジ資源等の資源管理を目的として、「日本海西部・九州西海域マアジ(マサバ・マイワシ)広域資源管理方針」が策定され、まき網漁業者を主体に小型魚を漁獲状況に応じて獲り控える取り組みが実施されています。こうした取り組みが着実に実施されれば、マアジ資源の持続的な利用につながります。

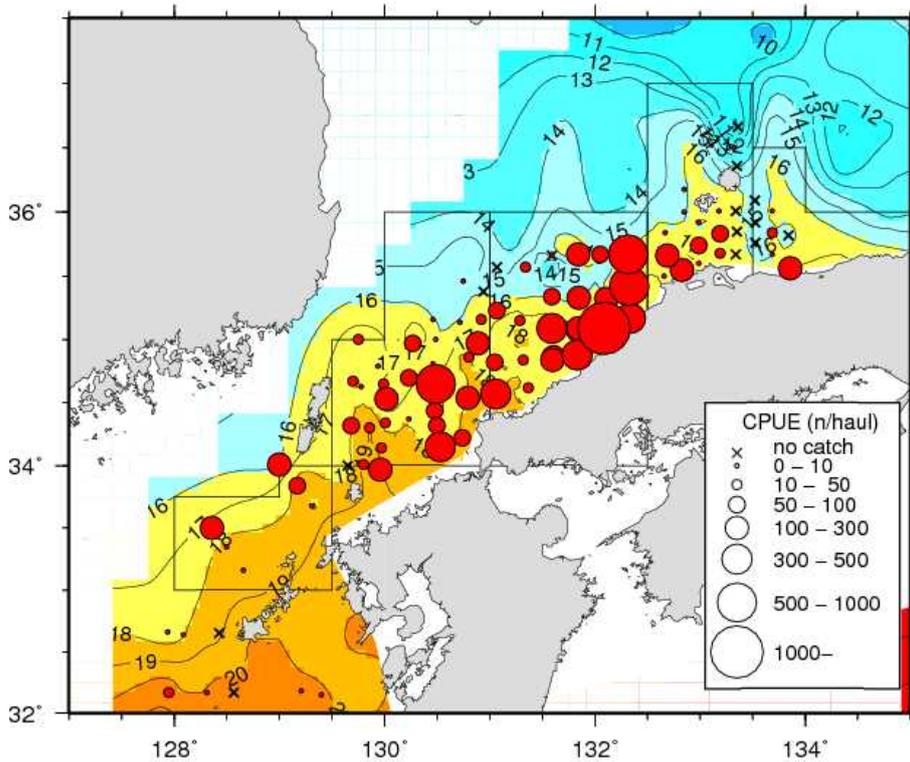


図1 中層トロール調査における2012年のマアジ幼魚の採集結果
 円の大きさはマアジの採集量の多さを表し、+は採集されなかった点を表す。カラー部分は水深50mの水温分布を表す。
 (資料：西海区水産研究所作成)

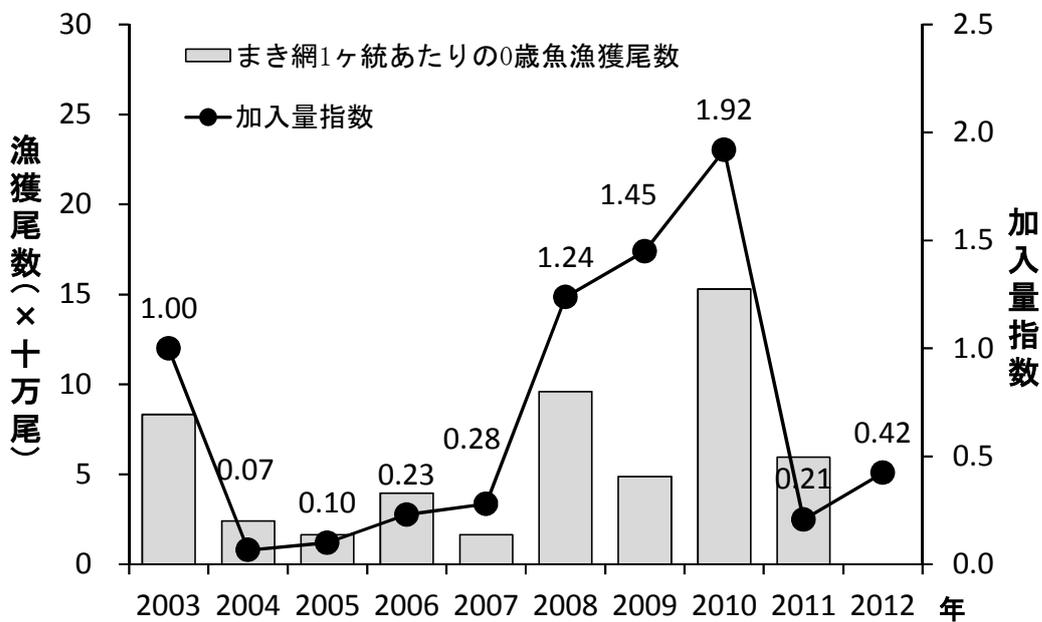


図2 マアジ幼魚の加入量指数と境港におけるまき網1ヶ統あたりのマアジ0歳魚の漁獲尾数※の年動向
 ※6~12月に境港に水揚げされたマアジ0歳魚の尾数を水揚げしたまき網漁船の数で割ったもの